

己斐上史跡社寺散策

国泰寺



文禄元年(1592)朝鮮出兵の折、豊臣秀吉は安国寺恵瓊と広島霊仙寺で談話した。文禄3年(1594)恵瓊は朝鮮木を持って帰国。霊仙寺を改築して、臨濟宗安国寺とした。関ヶ原合戦後、慶長6年(1601)福島正則が広島入城の際、尾張の雲興寺普照(正則の弟)を招き安国寺を国泰寺と改め曹洞宗とした。福島正則改易後、浅野長晟が広島に入府し、元和8年(1622)普照の隠居後は紀州大専山微州全宗が招かれ、浅野家菩提寺とした。この寺には赤穂浪士で有名な大石内蔵助の妻りくの墓が子供の墓と並び、また寺西織部の寿塔も建立されている。昭和53年(1978)中区中町より己斐に移った。

己斐山 浄心院



己斐山浄心院は、生秀和尚の開基になるもので、大日大聖不動明王の靈験を体し、宗祖弘法大師、入唐帰朝する際に勧請された密法の守護神、清瀧権現の靈異のご託宣により昭和48年11月、己斐の聖地に本尊を不動明王と定め當山鎮守 清瀧権現を真言宗総本山醍醐寺より分靈勧請し、衆生済度、修練道場として浄心院を建立す。爾来、真言宗総本山醍醐寺の法流を受け継ぐ寺院として、宗祖弘法大師の教えと 醍醐開山聖宝理源大師の標榜された実修実証の伝統を受け継ぎ、実社会と地域への貢献、人心の救済、自己の人間完成を目的とし本来の仏教の願いを実践している。

防草観音



この観音堂は己斐上四丁目、もとの着能谷の入口、向かって左の山の中段にあります。堂のある山は以前はもっと高かったのですが、宅地造成で上を削られ日生東団地となり、お堂の少し上には広い道路も出来ました。そして着能谷には奥を埋められて、今は高いコンクリートの擁護壁がつくられています。

防草観音は己斐上四丁目にあつて、宅地24坪の土地に建てられています。本尊は「不空絹索八臂観世音菩薩」と言われ、諸国巡礼中の六部さん(当時修行のため日本国内を歩くお坊さんのこと)が元文元年(1736年)ここで亡くなられたので、その念持佛を祀ったとのこと。それは「木佛」で昭和の初めのころまではお堂の中に祀ってあったが、その後所在が判らなくなり、現在は「檜佛」を祀ってあります。

ここは己斐の道路元標となっていました。文政二年の書出帳では、里程目標・防僧観音堂。同所より広島一丁目までは、一里半(6km)、廿日市市までは二里半(10km)、新庄までは一里(6km)、大塚、石内、古江各一里(4km)。

ここでは 防僧と書いてあるが、明治13年の明細帳では防草となっている。これは観音堂について書かれたものではなく、交通上の目標としてあげられたものです。それはこのお堂の位置が己斐村の中央部にあり、また己斐峠、畑峠、鍛投峠へも通じる道がお堂の下を通っており、目標として格好であり、己斐の道路元標のような役目を持っていたと考えられる。

広島から己斐の防草観音へは、本川橋から西進し己斐橋を渡り西国道から分かれ、石内道と呼ばれた現在の己斐の旧道を歩き、茶臼山の背後のこの観音堂に到着します。お堂は辻堂で遠くへ行く人は立ち寄りて休んだのでしょうか。

お堂の境内に立派な松があり、植木の己斐を象徴するような木でしたが、惜しいことに昭和60年「松食い虫」にやられ枯れました。お堂はそんな環境の中にもありました。

観音堂の後ろにある名のない石の墓が六部さんのものと言われる。お堂の中に「四国霊場札所当国八拾八箇所・七拾六番」と書いた木札があり、当時この観音堂は四国霊場札所の第七拾六番であったことがわかります。現在の観音堂は明治11年(1878年)に再建され、昭和55年再修理したものであり、また参道の石段は昭和61年6月に作られたものです。

毎年4月3日に己斐上一丁目から四丁目に住んでおられる有志の方がお祭りをしておられ、拜み方は「おんころころ、せんたりまろうぎ、そわか」陪して「おんあるりきや、そわか」と称えるのがよいが、自分の宗旨に合った念仏でもかまわないとの事です。

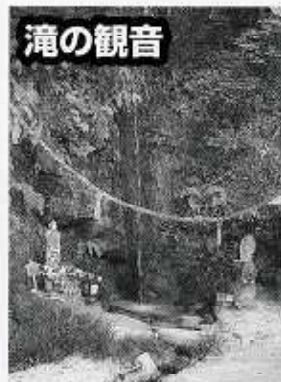
資料提供: 藤永

山の神



古老の話によると、何時の頃からか記録がないので判らないが、初めの頃は自然石(高さ60cm幅40cm)が置かれてあったが、あるとし異常に多数の牛が亡くなったことがあったのを機に、小さいながら社を建てた。その後、明山団地造成を機に、現在地の調整池下に移築された。この谷は浅く、稲の穂蒔き時期に水に不自由したことの証でもあろう...とされています。農業用水に関する神として、今も4月15日に種蒔祭事がある。

滝の観音



略縁起 周囲を深い山と幽玄な谷に囲まれ、流瀑がかかることから、古くから自然の聖地として救世の尊像が祀られ滝の観音と呼ばれていたが、大雨・大風により山が崩れた際、尊容堂宇とともに流失し、滝の観音の名のみ残った。嘉永3年(1850)土井半右衛門因親が広島誓願寺より法道仙人真作の聖観音の秘像を迎え、同義俊和尚の入仏供養を営んで、法道山観音院順教寺として再興を果たした。広島新四国八十八ヶ所の第十番霊場であった。

畑八軒



己斐上地区は中世、広島交通の要衝でした。昔、山陽道は府中から沼田を經由して五日市へ抜けていましたが、戦国武将の活躍した中世には府中町から武田山の銀山城を支配していた武田氏の一族が住む山本を経て、己斐、草津に抜ける道を通っていたようです。山本から己斐へは己斐ヶ丘病院下の鍛投げ峠

を通ったのではないかと思います。

伴方面へは岡目百目の裏から畑へまっすぐ登る道があり、広島市で市の立つ日には大勢の人が往来していたそうです。また、沼田から市内に通勤する人は歩いて峠越えをして畑地区まで出て、畑地区に置かせてもらった自転車で通っていました。

岡目百目の段々畑の下段の所に小さな社があります。畑八軒地区の一番上にお住まいの方が先祖から代々引き継がれていたものを、約20年前に現在の社に立て替えられたものです。今は畑地区の皆様で祭りが行われているとのこと。

唐塚

(からつか) 鍛投げ峠に近い田の中にムロノキが1本立っており、これが唐塚で、土地の人は「畑の神様」とも言って大切にしている。名前の起源はわからない。

岡目百目

大茶臼山の尾根のひとつで、開墾されて棚田と段々畑になっている。丘の上から四方がよく見えるのでこの名が付いたと言われる。

鍛投げ峠

己斐の最奥地の真北の峠。その昔、己斐村と山本村の村境の争いの際、鍛を投げて落ちたところを村境にしたことからこの名がついた。